

いつきの“ヒューマン・ビーイング” 人権について考える ②

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

「リビングライブラリ」で伝えたいこと

前号ではリビングライブラリのはじまりについて書きました。今号には、リビングライブラリを通じて生徒たちに伝えたいことを書くことにします。

2022年6月号(No.135)で書いたように、わたしは「人権は『思いやり』ではない」と言い続けています。では、わたしが考える人権学習とはどんな学習なのでしょう。その答は1年生のはじめにおこなう世界人権宣言の授業で伝えることにしています。それは「どのようにすれば人権が守られた状態にある社会をつくることができるのかということ」を学ぶ学習です。ここでのポイントは「つくる」にあります。「つくる」ためには「考える」だけでなく動かなければなりません。また「つくる」ためには「道具」が必要です。その道具の使い方を学ぶのが人権学習であると考えています。道具の使い方を学ぶためには、例えば、すでにそんな社会をつくるために動いている「人」、あるいは「知識」や「歴史」と出会うことが必要です。だから人権学習にはさまざまな出会いを準備しています。

では、わたしは人権学習を通して、生徒たちにどんな「知識」「歴史」「人」と出会うしてほしいと思っているのでしょうか。例えば部落問題学習では、歴史上のトピックとして、江戸時代の^{しぶぞめ}渋染一揆、あるいは全国水平社の設立、なかでも水平社宣言の起草にかかわった^{さいこうまんきち}西光万吉の人生がとりあげられることがよくあります。しかし、わたしはこのようなトピックを教材化することは、単に生徒たちの中に英雄の行為や英雄の存在を印象づけるだけのことになりかねないと思っています。子どもの頃わたしは、歴史神学の研究者である父親に「歴史とは何か？」という無謀な質問をしました。すると父親は「歴史とは重層的なものである」「歴史とは発展するものではなく展開するものである」と答えました。つまり、英雄や英雄的行為は、それ単独で起こるのではなく、歴史的行為として起こるということです。にもかかわらず、そのみをトピックとしてとりあげるとは、その背景にあったさまざまな人やできごとを生徒たちから隠してしまい、あたかもその人や

そのできごとのみが社会を変えていったという誤解を与えてしまうのではないかと思います。「人」についても同様であると思います。大きな声や大きな言葉が跋扈する今だからこそ、そうしたものの陰に隠れた小さな声や小さな言葉を大切にしたいと思っています。「本」^(註)のみなさんは、学生や会社員といった一市民です。そんな名もなき人が、歴史に翻弄されたり、時には日常を壊されたりしながらも、それでも日常を生き続ける中で経験したこと、考えたこと、感じたことと出会ってほしいと考えています。

「本」のみなさんの語りには共通するものがあります。それがわかったのは、「本」のみなさんでシンポジウムをした時です。バラバラな社会背景を持つはずのみなさんであるにもかかわらず、「しんどいなと思った経験」を語ってもらおうと、口を揃えて「他者との違いに気づいたこと」と語られました。そこで「みなさんにとって『フツー』ってなんですか？」と質問すると「まわりの人」という答が返ってきました。おそらく、ほんとうはまわりの人も多様な存在です。でも、きっとそれがわからない状況におかれているのでしょう。そしてそこから「自分をキライ」になっていけます。そんなみなさんに「なぜ今ここで語れるようになりましたか？」と質問すると、話は一気にポジティブになりました。それぞれがそれぞれにとっての「仲間」との出会いと、それを通じた自らの変わり目について語られました。そして、それぞれの経験に基づいた「語れる関係」の大切さを生徒たちに強調されました。

おそらくは「フツー」をつくりだすのは、「本」のみなさんを取りまくわたしたちです。しかし、わたしたちもまた、まわりの人を見て「フツー」であると感じています。そうした「架空のフツーの他者」が架空でしかないことを顕在化させるためには「語れる関係」、すなわち「仲間」の存在が必要であるということが、リビングライブラリを通して伝えたいことのうちのひとつです。次号には、今号では書ききれなかったひとりひとりの「本」のことを書きたいと思います。